

析を行った。

要 旨

東京港埋立地は都心から10km圏に位置し、東京東南部約4分の1の海面を補完する形で存在する。

東京港は、東京や首都圏への生活物資供給の為と同時に、国際港としても重要な港であり、埋立地はその港湾機能の全てを請負っている。また、社会情勢の変化に伴い、埋立土地利用計画も様相を変え、近年は都市問題解決の場としての土地利用が重点的に行われてきた。その1つに、東京23区の最終廃棄物処分場としての利用がある。現在1Hに約5,800tのゴミが埋立処分されており、これだけの廃棄物を内陸部で処分できない東京にとって、必要不可欠な役割である。この他、下水処理場、電力・ガス工場など住宅地との隣接が好ましくない施設の受け入れ地としての役割、既成市街地を再開発するための移転用地としての役割、既成市街地の交通渋滞を緩和するための交通施設用地としての役割、そして、公園・緑地・レクリエーション空間としての役割など、東京港埋立地の果たす役割は大きい。

緑の環境に対する関心が高まっている今口、埋立地は、既成市街地では確保困難な大規模な公園・緑地・レクリエーション空間の提供を海上公園設置という形で実現している。

東京港沿岸5区の公園分布状況では、1人当りの公園面積、平均公園面積、実際の公園配置状況の分析から、中央区・江東区・港区の3区で比較的良好な設置状況を示すことがわかった。特に江東区には、海上公園34ヶ所中、約3分の1の公園が存在し、海上公園開設の影響が明らかに及んでいる。

海上公園は、東京港沿岸区の1人当りの公園面積の拡大化と、緑被率の回復に貢献し、かつ、既存公園にはない、港や海と人とのふれあいの場を提供している。しかし、実際の利用状況は、大量輸送機関の整備不十分のため、広く人々の利用に供されていない。今後は、建設中の鉄道の完成とともに、広範囲での海上公園認識の普及が望まれる。

東京港埋立地が都心から近距離にあるにもかかわらず、これまで人々に具体的に知られる地域でなかった理由は、昭和50年以前まで港湾機能優先の開発が実施されていた事、交通機関の発達が不十分であった事、埋立地イコールゴミの島といった環境の悪いイメージが定着していた事の3点が考えられる。しかし、この10年間で埋立地開発の方針も変化し、東京港埋立地の担う役割やその環境にも変化が表われてきたうえは、人々の東京港埋立地に対する正しい認識と理解の必要性が高いといえる。

愛媛県今治地域におけるタオル産業の発達と地域への影響

酒 本 香

1 研究の目的と方法

本研究の目的は、愛媛県今治地域のタオル産業の発達をおいながら、それが、当地域にどのように関連し、どのような影響を与えているか、ということを明らかにすることである。

研究の方法としては、第1章から第3章までは、文献、統計資料を中心にまとめ、第4章は、地域での聞き取り調査を中心にまとめ、分析を行う。

2 まとめ

愛媛県の北部、高縄半島の北東部に位置する今

治市は、タオル産業と造船業のまちである。

今治地域は、古くから綿業がさかんであり、タオルは、白木綿、綿ネル、広幅織物から発展した。今治タオルは、明治27年を創業とする。

日本のタオル産業は、今治地域と大阪の泉州地域が、二大産地である。今治タオルは、その出荷額において、全国シェアが高く、それに対して、泉州タオルは、その生産高において、全国シェアが高い。これは、今治タオルと泉州タオルの相違を特徴づけている。今治タオルは、先晒タオルで、ジャガード織のタオルケット、バスタオルといっ

た色柄もの、高級タオルを得意としている。泉州タオルは、後晒タオルで、白の浴巾といった相場ものが中心である。

今治タオルは、生産量、出荷額において、すでに低成長期に入っている。これに対し、近年タオルのアパレル化が進んでいるが、現状は厳しい。輸出入も、発展途上国、中進国の追いあげにより、今後の対策が必要である。今治地域のタオル工場は、工業地域を形成することなく、市街地、住宅地、造船地域、農村地域にまで、広く分布している。

今治地域におけるタオル産業の地域への影響について

①造船業との関わり

今治地域の造船業は、近年、頭打ちの状況にあり、工場も、中心が他の地域へ移転している。タオル産業と造船業は、バランスを保ち、地域経済を支えている。造船地域にも、タオル工場が立地しており、造船業からタオル産業への、転業の例もある。また、家庭内で、夫が造船業、妻がタオル産業、という例もある。

②農業との関わり

今治地域では、農村地域にタオル工場が多く分布している。これは、タオル工場の従業員だった人が、新しく工場をもつ時、土地の広くて安い農村地域を選ぶ場合、市街地に工場をもっていた人

が、公害その他の理由で、農村地域に工場を移転する場合、農家の二男、三男が、新しくタオル工場をはじめるとある。

農家の兼業としてのタオルの製織は、現在、今治地域では行われていないが、関連部門である燃糸工程では、農家の兼業が多い。

③分業のしくみ

タオルの製造工程は、細かく分業化されており、それぞれの専門の業者が、これを分担している。燃糸、染晒、紋紙からパッケージに至るまで、極めて多くの企業、人々が、タオル産業に関わっている。

④流通のしくみ

タオル産業は、流通業との関わりが強い。流通チャンネルは、1つめは、タオル専門問屋、2つめは、30年代以降タオルケットの影響で、寝具商、3つめは、50年代になって、ブティック、お土産屋などである。地理的側面では、大阪、東京、名古屋の順に、結びつきが強い。

以上のように、今治地域では、タオル産業と地域が、非常に密接に関連している。タオル産業の基盤が、地域にしっかりと網の目のようにはりめぐらされており、タオルは、その網の目を往来することにより、造りあげられるのである。

福島市の温泉地における都市化の影響

鈴木 純子

長期休暇に調査が行いやすく、また興味も持っていたので、私は卒業論文では出身地の福島市の温泉地を扱うことにした。福島市内の温泉地としては10余あるが代表的なものは飯坂・十湯・高湯である。これらの温泉地の性格を、都市化の影響がどのように現れているかを主にして多角的に分析することを目的とした。

市内で最多の入込数があり、しかも古い歴史を持つ飯坂温泉は、歓楽街的性格が非常に強い。土湯温泉は山間部の保養地型温泉である。高湯温泉も山間部にあるが、ドライブやスキー等の基地としての性格と療養型温泉としての性格を合わせ

持っている。近年の入込状況はそれぞれの温泉地で傾向を異にしている。土湯温泉は増加、飯坂は減少・横這い、高湯は減少を示している。同じ市内にありながらもこのような相違が生じる要因はいくつか考えられる。第一に市内の温泉地に大きな影響力を持つ磐梯吾妻スカイラインの存在である。スカイラインの入込数が激減しているが、最も相関の高い高湯温泉がそのダメージを直接的に受けたわけである。第二に、現在温泉ブームといわれているが、中でも土湯のような保養地型の温泉地が好まれているのではないかと思われることである。逆に言えば、飯坂のような歓楽的な温泉